亡国の解放軍

霧夜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
亡国の解放軍

【Ｎコード】
Ｎ１９０６ＢＡ

【作者名】
霧夜

【あらすじ】
ある世界に四つの国があった。その一国である、『クラリニア帝国』が『キタリア公国』に戦線布告。しばらくして、『クラリニア帝国』が主人公である魔術師ライト・ハーデンス、シリカ・ハーデンスが住む『ガーランド王国』にまで戦火が広がる。『クラレリア帝国』を国内に導いた、協力者とは？亡国となった『ガーランド王国』の運命は？

プロローグ（前書き）

こういう小説も書いてみたくて書きました。後悔はしているが、反省はしていない。
たくさんの方々に見ていただけると嬉しいです。

プロローグ

とある世界に四つの国が存在していた。一つは、『クラリニア帝国』強大な戦力を誇る大帝国である。二つ目は、『キタリア公国』軍国主義を掲げ二番目に戦力が多い国家である。三つ目は、『フタレリア共和国』政策に「自由主義」を掲げている国であり、四つの国の中で一番技術力が高い。そして、最後に『ガーランド王国』戦力も一番小さい国だが、国内に二人だけの魔術師が存在する国である。この物語は、その二人の魔術師から始まります。

「はぁ～・・・。」

しょっぱなからため息をついているのはライト・ハーデンスである。

「兄様・・・。また、何か見えたのですね・・・。」

そのように声をかけたのは、ライト・ハーデンスの妹であるシリカ・ハーデンスである。シリカの言う『見えた』というのは、未来のことである。この兄妹には、特殊な能力が備わっていた。兄は、未来を見て予言し、禁忌（きんき）とされる魔法を覚えることができるのである。妹の方には、精霊魔法を使う力が備わっている。また、その影響なのか兄の眼は、右目が黒く、左目が紅い。妹は、右目が青く、左目が赤色である。

「あぁ・・・だが今回は、物凄く最悪な未来が見えた。」

「・・・最悪？」

「あぁ、近いうちに戦が起きるだろう・・・。それも、この世界すべてを巻き込んだな・・・。」

「！？・・・そんな未来が・・・。」

「あぁ、すぐに王に知らせなければ・・・。」

「・・・はい。」

シリカは、その一言で答えるとすぐさま呪文を唱え始めた。

「風に宿りし、精霊よ。その風の力を持って、我が足にやどえ。」

すると、シリカの足元も緑色の風が吹き抜け、シリカの足に、緑色の小さな竜巻が宿った。そして、エリカの周りを手のひらサイズの緑色の精霊がくるくる飛び回っている。

《あら。久しぶり！エリカ。どこかお出かけ？》

「・・・久しぶり。エアー。えぇ、ちょっと王様のところにね。あ、兄様にもお願いね。」

《あ、えぇ、分かったわ。気を付けてね。》

「・・・ありがとう。」

シリカの読んでいる『エアー』とは、風の中に宿る精霊の名前である。もちろん名前は、シリカが名ずけた。

・・・数分後・・・

ライトと、シリカは空を飛んでいた。もちろん、この世界で空を飛べるのは騎竜兵（きりゅうへい）と呼ばれる飛竜を操り戦う兵士や、『フタレリア共和国』の持つ『飛行機械』と呼ばれる物と、ライト、シリカぐらいである。そのため、二人が空を飛んでいるととても目立つ。

「おい！あれ！！」

「あ！？・・・おぉ！ライト様にシリカ様じゃないか！」

なぜ、二人が様付で呼ばれているかというと魔術師は、この世界に二人しかおらずそして、予言でこの国や、人を守り、けがや病気の人を料金なしで治療してくれるからである。そう、この国の二人はこの国の国民からすれば神と、女神のような存在であった。

「おい！国王の城に向かってるぞ！！」

「なんだって！！国王がお倒れになられたのか！？」

「それか、この国に何かおきるのでは・・・。」

この国の国民は、国王への忠誠心が高かった。なぜなら、自分たちの国を豊かにし、さらに、平和に保ってくれているからである。

その噂は、国中に伝わり二人が城につきしばらくすると、城の中庭が国民で埋め尽くされたのは、完全な余談である。

プロローグ（後書き）

誤字、脱字などありましたら気軽にコメントください。

主人公解説（前書き）

今回説明です。

主人公解説

主人公

？

名前：ライト・ハーデンス
身長：１６５ｃｍ
体重：４２ｋｇ
年齢：１８歳
容姿：右目が黒で、左目が紅い。目の色を除けば普通と変わらない少年。
服装：黒いローブに、黒いブカブカなズボンをはいている。
好きな物：辛い物、黒い物、未来予言、冗談を言うこと、話をすること
嫌いな物：苦い物、恐ろしい未来
好きなタイプ：優しい人
嫌いなタイプ：人の命をどうとも思わない人
一人称：俺
妹の呼び方：シリカ
解説：冗談が好きだが、やばい時には冗談は言わない。妹思いの兄。５歳の頃に親を亡くして以来、兄妹で生活してきたために兄妹の間の絆は固い。水晶玉を使い、未来を見て予言することができる。しかし、幼いこともあってか見える未来は、三年先までである。それ以上先は、力不足により見えない。禁忌の魔法を使うこともできる。禁忌の呪文とは、主に『不老不死』、『人体蘇生』等、自然の摂理を乱すようなことである。妹を「シリカ」と呼ぶため、初めて会う人からは、恋人と間違われることがある。人と話すのが好きで、よく世間話をしているところが目撃される。

？

名前：シリカ・ハーデンス
身長：１３５ｃｍ
体重：・・・秘密です／／／
年齢：１６歳
容姿：右目が青、左目が紅い。目の色を除けば普通と変わらない少女。
服装：白いローブに、インデッ〇スが頭にかぶっているあれ。ミニスカートをはいている。
好きな物：甘い物、人の傷を癒すこと、動物と戯れること、花を観賞すること
嫌いな物：苦い物、人が傷つくこと
好きなタイプ：兄のような人（優しい人）
嫌いなタイプ：自己中の人、人の命をどうとも思わない人
一人称：私
兄の呼び方：兄様（あにさま）
解説：年齢の割にはおとなしく、人と話すところを目撃されることはほとんどない。元から、無口で人見知りが激しい。兄思いの妹である。無口だが、人が傷つくことを嫌い傷ついている人を放ってはおけない性格である。精霊魔法を使うことができる。精霊魔法とは、主に『人体回復』等もあるが、自然界のいろいろな物に宿る精霊の力を借りて使われる魔法を指す。動物と戯れるのが好きで、よくいつもの暗い表情からは予想できないほどの笑顔で戯れているのが目撃される。この笑顔は、兄と動物にしか見せたことがないという。また、おとなしい性格からは予想できないが、意外と格闘ができる。特に蹴り技が得意でその足から繰り出される『ローキック』を喰らった者は、鼻血が必ず出るという。しかし、兄は「あまりやらないほうがいい。」と言い聞かせている。なぜなら、ミニスカートの下に短パンなどを履いておらず、キックを繰り出すと、９０。の角度で繰り出すため、丸見えなのである。あえて、何とは言わないが・・

・。また、年齢からか胸と、身長にコンプレックスを抱いており、自分と同じ年齢で身長が自分より高く、胸が貧乳でないと必ずｏｒｚの形になって落ち込むという。

主人公解説（後書き）

イン〇ックスのあれなんていうんだろう？ｗｗｗ

王国の危機　帝国兵が侵入！（前書き）

今回も無理やり要素満載ですがどうぞ。

王国の危機　帝国兵が侵入！

・・・ガーランド城・・・

この『ガーランド王国』を治める『ガーランド・リヒルスキー国王』が暮らす城である。見た目は中世ヨーロッパのような煉瓦造りの城であるが、攻城鎚でもそう破ることが難しいほどの防御力があり。もしもの時の国民の避難施設となっている。

「な、なに！それはまことか！！」

この声を上げた者こそ、この国の国王ガーランド・リヒルスキーである。

「はい、陛下。この国にも戦火の影が襲いくると予言に出ております。」

ライトは、はっきりとした口調で言葉を淡々と述べた。シリカは、いつもどうりの暗い顔でその横に片膝をつき頭を下げている。

「・・・。なんということだ・・・。この国にまで戦火が・・・。」

「はい。私も・・・残念でなりません。」

ライトも、実は悲しかった。見ず知らずの自分たちを、みんなと違う自分たちを快く迎え入れてくれたこの国が争いという物に飲み込まれそうになっているのである。悲しがらずにはいられないであろう。

「国王陛下！」

大声を上げて王室に入ってきたのは王国軍第一斥候部隊隊長である『ケルスト・ハーフェン』である。

「どうしたのだ？」

ガーランド国王は温厚な人間であり、普通の国王ならどなしあげているところでも落ち着いている。

ハーフェンは王の前で片膝をつき述べた。
「クラリニア帝国がキタリア公国に戦線を布告しました。」
「なに！・・・。」
「国王陛下・・・。」
ガーランドは、その方を聞くと倒れこんでしまいその王に隣に立っていた大臣『フライント・ボゾフ』が心配そうに声をかけた。しかし、ハーフェンの持ち帰った情報はそれだけではなかった。
「帝国は、戦線布告と同時に騎竜兵による奇襲攻撃を行ったらしく、奇襲を受けた公国軍部隊はそのほとんどが壊滅。キタリア公国国王『ウエスペット・ガザフ』は失脚しました。現在は、我が国に向けて兵をあげる可能性が非常に高いと思われます。」
「・・・そうか・・・。すまん。ライト・ハーデンスよ、もう一度、世の目の前で占ってはもらえまいか？」
「・・・承知しました。」
そう言ってライトは水晶玉を取り出し両手の魔力で水晶玉を宙に浮かべて占い始める。

「・・・！？国王陛下・・・。見えました。」
「・・・それで、どう出ておるのだ？」
ガーランドの目はそう。国民全員を我が子のように思い、そして我が子を心配する眼であった。
「帝国はすでに我が国に兵を出しております。そして、この城内に裏切り者と、帝国兵が数人紛れ込んでいる。そう出ております。」
「な、なんだと！？」
ガーランドは、この日、初めて大きな声を張り上げた。
「す、すぐに兵を城内に集めて裏切り者と帝国を兵を見つけ出せ！！」
「・・・国王陛下・・・その必要はありませんよ。」
「な、なんだと！」
国王にそんなことを言ったのは他ならぬボゾフ大臣であった。そ

の口は、にやけている。
王は急いでライトと、シリカの元へと駆け出した。そして、
「ハーフェン！なにをしておる！早くやつをとらえよ！！」
「・・・国王陛下・・・それはできかねます。」
「な、お前も裏切り者であったか・・・。」
国王は絶望の淵へと立たされた。自分が信頼していた大臣、それにハーフェンが裏切り者であったからだ。
「・・・そういうことです。」
そう言うが早くハーフェンが笛を鳴らすとドアから数人の兵士が入ってきた。
「国王陛下・・・。あなたはこの国を思うあまり慎重になりすぎた。・・・この国は帝国に加わってこそ本当の強さが見いだせる・・・そうは思いませんか？」
「世は、そんなこと思わん！」
「・・・そうですか。なら仕方がありません。ハーベント兄妹よ！帝国の首相はお主達の事を気に入っていられてな。どうだ？我らに協力せぬか？協力すれば、高い身分をもらえるであろう・・・。」
ボゾフの狙いはここであった。どんな者にでも欲というものがある。人間ならば誰もが持っているはずだ。ボゾフはそこを狙った。いくら魔術師であっても欲があると思っていたのだ。
「「お断りします！！」」
だが、ハーベント兄妹にそんなものは存在しなかった、いや、捨てたとでも言うべきだ。人の欲により両親が殺された。だから、この兄妹は欲という物をすべて捨て今まで生きて来ていたのである。そんな兄妹にそんな交渉無意味であった。
「そうか・・・。なら仕方ない、とらえるまで！ハーフェン！その者達をとらえよ！！」
「了解しました！かかれ！！」
ハーフェンの掛け声とともに兵士がとらえようと近づくがそれは叶わなかった。なぜならライトが持っている杖から火球を飛ばして

いるからである。炎系統の初級呪文だ。
なおも近づいてくる敵にはシリカが蹴りを入れていく。
”ゴス”
その音と共に一人の兵士が鼻血を出しながら倒れた。
「・・・無駄・・・。」
シリカが足を振り上げた体制のまま、顔を普段より暗くして言い放つ。
「・・・シリカ・・・。パンツが見えるからなるべくやめなさい。」
「・・・分かりました・・・。／／／」
兄の発言に顔を赤らめながらシリカは答えた。
「・・・エアー・・・。」
シリカはそう小さくつぶやくと一匹の精霊が現れた。
《どうしたの？シリカ？》
「大至急この部屋の騒ぎを風に乗せてこのお城中の兵士に届けて。」
《分かった！》
そう言うとエアーはドアから出て城中を回り始めた。

王国の危機　帝国兵が侵入！（後書き）

はい。よくありがちなパターンですね。分かりますw

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1906ba/

亡国の解放軍

2012年1月6日21時51分発行